

目覚めた世界は、眩い光に溢れていた。

舞浜サーバーに訪れた冬、ミナトが迎えた初めてのホワイトクリスマス。昨日から降り積もった雪は、舞浜の街を真っ白に覆いつくしていた。

それはミナト自身が望んだ光景ではあったのだけれど、望んだ以上のものを見せられたようにも思えた。

ミナトの望みに力を貸してくれた、クロシオやイリ工達のおかげではある。けれど、もっと違う何かを感じる。

——私の他にも、ホワイトクリスマスを夢見たひとが沢山居たのではないかしら。

そんな想いを舞浜サーバーが汲み取って、この明るく白い朝になった。それは十分ありえることだった。

この世界は、人の想いで紡ぎあげられているのだから。

「本当にいいのね」

ミナトが念を押すと、シズノは猫を抱いたまま頷いた。

二人はこの積雪の街中に出かけたくはないのだという。

「じゃ、行ってきます」

「行ってらっしゃい。気をつけてね」

「お互いにね」

手を振って答えて、ミナトは一人で家を出た。

晴れた青空に、たまには一人もいいかと思えた。

白いプリンセスラインのコートに長い水色のマフラーを巻いてミナトが向かったのは、舞浜市内の教会だった。

クリスマス当日の朝の礼拝には、思いのほか人が集まっていた。ぼつんと一人だったらどうしようかと思っていたが、教会でのクリスマスの雰囲気味わいたいのもミナトだけではなかったようだ。

こぢんまりとした教会はモダンな建物で、クリスマスらしい装飾もさりげなく落ち着いた趣が感じられた。

礼拝堂に入ると、そこには光があった。

まるで飾り気のない正面の壁を十字に切り裂くスリットから光が差し込んでいた。室内の陰が、屋外の積雪の白さを吸い込んだ眩い光の十字架を際立たせて、美しかった。

祈りの場に差した光は、ミナトにあの出会いを思い出させた。シドニーサーバーでの混乱の中で差し伸べられた手と、ミナトを優しく見つめてくれた董色の瞳。

「僕と行くかい？」

その優しい声を、ミナトは今でも自身のデータの中に呼び出すことができる。セレブラムの飛行母艦オケアノスの副司令としてミナトが歩き出すことができたのは、光と共に現れたシマ司令が居てくれたからだ。

今はもう、その形は失われてしまっただけだ。

幻体クローンとしてのシマ司令のデータは壊れて消えてしまったが、シマのオリジナルからもたらされたデータの中に、かつてのシマのデータの断片が紛れ込んでいた。それを集めている器が、今朝シズノが抱いていた猫だ。

シマとしての記憶の断片が時折顔を出すとはいえ、普段は陽だまりで眠るただの猫でしかない。セラブランドとしての記憶を失ったシズノに懐いている様子は、かつての二人を知るミナトとしては切なくも微笑ましくもあり、もどかしくもある。

今頃、シズノの部屋のコタツで仲良く一緒にぬくぬくしているのだろうか。

そんなことを考えていたらオルガンの前奏が始まった。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」

ヨハネによる福音書第三章を朗読する声を、ミナトはどこか遠くに聞いていた。

誰でも新しく生まれなければ、水と霊とから生まれなければ、神の国に入ることはできないのだという。

量子コンピュータという機械仕掛けの方舟に保存されている、肉体を失った幻体が、神の国にたどり着くことはできるのだろうか。

永遠を拒んだソゴル・キヨウは新たに生まれ変わって、水の向こう側の世界で限りある生命として生きている。

キヨウの居場所には神の国から遠いのもかもしれない、けれど彼の生きる姿には光が溢れているとミナトには見える。

——私は、どこへ歩いていけばいいのだろうか。

それは、あの日に見た光が指す方へ。
そう分かっているから、ミナトは顔を上げて、眩い光の十字架を見据えた。

礼拝が終わって、教会を出たミナトは思いがけない人影を見た。くすんだ金髪の長身は人混みでも目を引いた。

「クリス、来ていたの」

「メリー・クリスマス、副司令」

私服のカジュアルなジャケットを羽織ったクリス・アヴニールの柔らかな声に、ミナトは微笑んだ。

「メリー・クリスマス。ミナトでいいわ」

オケアノスのクルーとしてミナトたちと共に戦ったクリスは、今は前任艦のドヴァールカーに戻った格好になっていた。彼が舞浜に来ることは、珍しかった。